

世界思想としての国体論と世界皇化

荒谷卓

今泉定助先生の神道思想は、世界人類を救済せずには止まぬ一心に溢れた世界思想である。その骨幹をなす「国体論」と「皇道論」は、宇宙創元以来、世界が一体であるという原理と、その原理を顕現するための行動について論じている。

しかしながら、醜聞なる日本人論を世界に定着させたルース・ベネディクトのように、悪意と偏見をもつて日本文化を否定する立場の人々は、「国体論」といえば封建的で差別的な階層社会を正当化する卑劣な理論とし、また、これを世界的に拡張するための悪意の計画が「世界皇化論」と断定している。常識的な戦後日本人でさえ、それが日本民族を優越的に鼓舞する独善的ナシヨナリズムであろうと思いがちである。

このような誤解は、日本人のみならず世界の人々にとつても不幸なことである。今泉先生の「国体論」「皇道論」は、差別的排斥、階層構造社会等のあらゆる対立や、西欧思想そのものの中にある対立的世界観をなくし、宇宙創元以来、万有万象は統一体として生まれ、成長し、生み出すという神道の一体的世界観により、対立的世界観から生まれる利己的・競争的発想を利他的・共助的発想へと切り替えることで、世界を共存共栄社会へと改革する人類思想としての意義を有する。

近代以降、世界のグローバル化は急速に進み、それと共に世界は、「基本的人権」を絶対正義とする近代自然権思想によって支配されてきた。

今泉先生が存命の時代は、主権単位たる国家の軍事力による利権獲得競争を是とする、もつとも激烈なる国際情勢下にあつた。こうした時代背景にあつて、維新を遂行した明治以降の日本政府は、日本文化を保全し、さらには、その価値を世界に宣布することを目的として、欧米式の富国强兵政策により国家としての実力強化を優先した。しかし、手段であつたはずの欧米化が、日本の政治文化を西欧合理主義へと変質させ、当時の国際ルールに正当性を求める競争主義的政策へと転換させた。そうして、欧米諸国が作った国際秩序にしたがつて合法的に競争主義政策を推し進め行動した結果、必然的に大東亜戦争へと行き着くこととなる。当ても現代も、日本が、いくら合法的だと主張したところで、欧米諸国が創つた国際ルールは、彼らの国益獲得活動を合法化するための法秩序であり、彼らが手にすべき利益を日本に横取りされることは許さないのだ。

ここにいたつて、今泉先生は、大東亜戦争が皇道の世界宣布のための聖戦でなくてはならないとし、八紘為宇の大理想を世界に顕現することを願つた。この一点だけを見れば、好戦的ナショナリストと誤解されかねないが、その本質は全く正反対である。それは、先生の武の考え

方を知ればよく理解できるところだ。皇道發揚に掲載された「我が武の本義」によれば「皇国の武は対立に起因する破壊のための武ではなく、一体的親心に基づく生成化育のための武である」としている。つまり、国益のための戦争であつてはならない、人類救済のための戦いであるべきだ、と訴えたのである。

国際政治の趨勢を左右できるほどの政治力を持たない日本が、ましてや、自らより圧倒的に巨大なる国家に対し意図的に戦争を誘導することなどあり得ない。しかし、大国の意図によつて国際政治の流れが戦争不可避へと仕向けられた以上、戦争の是非を論じても空虚であつて、いかなる目的で戦争を遂行し、戦争を通じて何を成し遂げようとするのが重要になる。戦後は、日本が対米英戦争を決断したことを非難するが、それは、全く愚かな批判であることは一般のイラクでの戦争等の例を見ればよく分かることだ。サダム・フセインは最後まで戦争を拒否し、イラク軍は無抵抗であつたにもかかわらず、米国の主導する多国籍軍は戦争を遂行し、イラク政府を転覆させ、資源を奪い取り、現在に至るまでイラク国内は混乱状態にある。圧倒的強者による戦争の強要に対しては、国家として正義と誇りを示すか、自らを貶め蔑まれるかの選択しかない。

対英米戦争不可避の情勢を踏まえ、今泉先生は、日本が欧米と同じ合理的国益判断による戦争に陥ることを排し、日本民族の本来的使命である「八紘為宇」を世界に顕現し平和の礎を築くことを祈念したのだと思う。

昭和十九年九月十一日、今泉先生は、「世界皇化」を祈願し帰幽された。

戦後日本は、先生の信念とは正反対の道を歩んできた。「戦争で負けたのは歴史・文化・思想等日本的なもの総てが間違っていたからだ」といわんばかりに、日本国家の正義と誇りを犠牲にして米国の庇護の下での経済発展を選択した。その結果、祖先が二千年以上の歳月、血と汗を振り絞って築いてきた利他的生活文化に支えられた家族的社会の絆は、利己主義を正義とする自由競争社会へと変質しつつある。

また、国際社会も冷戦間の東西対立が終わるとともに、近代西欧思想の自然権がより先鋭化した「新自由主義」を基調とする新世界秩序へと移行した。それによれば、個人、国家等あらゆる存在の排他的対立関係を前提に、軍事力に経済力・情報力を組み合わせた実力による自由競争に世界秩序をゆだねることが正義であるという。しかも、ホップスの自然権を志向する米国の政治思潮は、

イギリスのような強者間のパワーバランスに満足するものではなく、あくまでも唯一の勝者の決めたひとつのルールで世界人類が管理されることが必要で、米国はその使命を神によって与えられたとする「マニフェスト・デステイニー」に特徴付けられる。「自由を世界に」（市場原理を世界に）行きわたらせることが米国の使命であり正義であるという。

今や、自由競争の主体は、国家から個人へとかわり、これによって世界中の福祉政策はほぼ瓦解した。かつては福祉国家を誇っていたイギリスや北欧諸国を先頭に、世界中の国が福祉政策を放棄し自由競争社会へと転換を図っている。社会は壊れ個人に分断され、競争に負ける者は無能か怠け者とされ救済されることはない。競争が続く限り勝者は徐々に絞り込まれ、同時にその富は急速に膨れ上がるが、その富が貧困の敗者に還元されることなく、貧富の格差は際限なく拡大を続ける。これに抵抗を試みる者はテロリストと呼ばれ合法的に殺傷される。

ここにいたって、世界の人々は、ようやく近代西欧史に誕生した自然権の思想と制度に疑問を持ち、現在、世界に共通して起きている諸々の深刻な社会問題の原因を哲学的、思想的さらには神学的に深く考えなくてはなら

ない時代となった。

そして、日本人は、先の東日本大震災に遭遇して、無意識の中に置き去りにされた「絆」や「思いやり」という人と人の一体観のありがたさ、利他的社会の尊さといった日本の伝統的社会規範を自覚できるようになってきた。そして何より、そうした日本人の一体的心のつながりの中心に天皇陛下がいらつしやるということを理解抜きに感じることできたのではないだろうか。

現代の社会は、今生きる我々に与えられた恵に満足せず、先祖が蓄えた過去の恵を使い果たし、未来のための恵まで摘み取り、過度の豊かさを享受した結果、厳しく貧しい時代を生きていかなくはならない環境を作っているようだ。

近代以降、人間が作り出した総ての思想、哲学、制度をもう一度見直し、よりよい世界を創造するための社会活動へと転換を図る動きが世界中で始まっているのも、そうした共通認識によるものだろう。

こうした時代だからこそ、今泉先生の思想は、人類の未来のために極めて重大なる光を放っていると信ずる。先生の思想は、世界を見据えた神道論である。日本精神思想史の内省にとどまらず、また、他の宗教や思想への単純批判や独りよがりの同調に陥らず、深層原理を比較

的に論じていることによって、現状の思想哲学の問題点と具体的改革の方向性を明瞭に提言している。

私は、今一度、今泉先生の思想を、現代の日本人のみならず海外の方たちにも紹介したいと強く願うものである。しかし、私は、一武人であつて学者ではないし、神道、哲学、社会学の門外漢であるため、学術的論証によりその役割を果たす能力がない。そのようなことを省みつつも、なおこの拙文を公けにするのは、今泉先生の精神を継承せずにはおれないという強烈な思いからである。願わくば、一を以つて万を知る聡明の志士の笑覧をたまわりたい。

一 存在思想から生成思想へ

今泉先生は、個人の存在の絶対的権利を前提とする近代西洋思想からは、真の世界平和と万民の幸福は生じ得ないと説く。個人の存在を出発点とし、その維持擁護を目的とすれば、人と人、人と国家、国家と国家などあらゆるものが対立状態を引き起こし、常に何者かを脅威と感じ排他的性質になるは自明のものとなるからだ。

例えば、ルソーは社会契約論の冒頭で「人間の最初のおきては自己保全をはかることである」と断定し、人間

が社会を構成するのは「多人数の協力により共同で身体と財産を護る」ためであるとする。そうした思想によって形成された諸国家からなる世界は、自国の利益の擁護を目的とする政治意志を有する個々の集団であり、「このような各自独立意志の集合による擬制せられた世界秩序の中に、果たして全国家が総て満足せる所謂国際正義が生まれうるだろうか」というのが先生の問いかけである。「何れかの国は不相応の利益にはくそ笑み、何れかの国家は不満なる犠牲に胆を嘗めてるにちがひあるまい。何時爆発するかわからぬ不安なる情勢に乗って、外交が権謀術策に陥るのも無理ならぬところである。」と、国際情勢を見据えている。

そのような世界の情勢を憂い、「全世界人類を挙げて、安国と平らげき中に生活したいというのが、人類の究極の理想であり、総てのいつわらぬ念願である。」との思いが先生の思想に貫徹している。そしてそのためには、存在思想の宇宙観、人間観、世界観を根本から見直すべきことを力説されている。

人間の存在意義、あるいは、宇宙（自然）と人間の関係を深く掘り下げていくと、それはおそらく「神」の概念に行きつくことになるだろう。

例えば、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教では「はじめに神在りき」。全てを創造した神は、はじめから存在し、万物の外から万物を創ったとされ、創るものと創られるものを対比してとらえる。また、神によって創られた「光」と、神の創造によらない「闇」とを対立させ、創生から二律背反の対立世界を描いている。

神が創造した最初の人間アダムも、神から物質として存在を与えられ、分身としてのイブ以外の存在とは、完全に独立している。さらに、神の永遠に対し、創られた存在には終わりが在り、世界にも世紀末があると考えるしたがって、人もまた「我在り」と他の一切の外にある存在に対し独立して存在するとしてとらえ、その存在は肉体の死によって完全に終わることになる。つまり、人間にとつての実在世界とは、有限の時間に、(物質としての)個人が認識できる自己とその他の存在だけである(絶対創造主たる神は別の世界に存在している)。今泉先生は、このような「在る」を基底とした思想を「存在思想」と呼んだ。

一方、日本の神話では、天地初発之時、高天原に天之御中主神が「成りませる」。つまり神は、宇宙(神、宇宙時の万物万象を一体としての宇宙)そのものとして成ったとされる。最初の神が天(宇宙)の中心と成り、天地の

神々が次々に生成し森羅万象を生み、その「生成」は連綿と無窮に続くと考えた。したがって、その生成によって生まれた人は最初の神の性質（霊）を継承し「生まれ成り」、宇宙万有と一体となって、宇宙の生成活動を担うべき霊体としてとらえる。物質としての人の死は、いわば宇宙（自然）の新陳代謝で、その霊的性質は、神とともに永遠であり、新しく生まれたものに引き継がれることになる。今泉先生は、すべての存在は「生まれ成る」から在るのであって「成る」立場に立って体験・体得・体顕する行的境地から始めて真理を知りえるとし、これを「生成思想」と呼んだ。

日本神話の世界観は、宇宙創元以来無窮に続く時間的・空間的・霊的全体であり、人が存在として捉えることができる物質ばかりではなく、未確認の物質や、存在としては認識できない霊、魂、生命のような非物質、過去から未来に続く無限の時、そして神をも含む万有万象の総てが含まれるということになる。

興味深いことに、現代の最先端の素粒子物理学は、エネルギーと物質の交換原理を証明し、宇宙の創元はエネルギーが物質を誕生させたとの理論が証明されている。宇宙は非物質たるエネルギーと物質と時間から成る。科学はようやく神道の宇宙観に近づいてきた。このエネル

ギーこそ、私たちが霊、魂、気等と呼んでいるものなのだ。

こうした神の概念の違いは、歴史的に現代に至るまで、諸々の思想、発想の捉え方に大きな影響を与えていると考えられる。近代西洋において人権思想が生まれたのも、現代の新自由主義が自由競争による富の独占的所有を正義と考えるのも、神を否定した唯物的共産主義思想でさえも、その根源は、彼らの「神」の概念に由来すると考えられる。

これに対して、日本の「神」の概念からは、宇宙を一つの生命成長体としてとらえるので、総ての人は、家や社会、地球、宇宙、時、神の一員として何らかの役割を担うのであるから、自己の成長は全体の成長であり、全体の成長は自己の成長ととらえる。人の体で例えるならば、数百兆個とも言われる体細胞一つ一つの生成活動が人の成長として現れているのと同じだ。

人間は、社会に生まれ、相互に助け合い、自然と調和し、家を、地域を、国家を、世界を、宇宙を常に成長発展させるよう活動することが自然の状態と考える。したがって、個々が独立し対立するという発想はありえないし、そのような自己本位な考えは禍憑く（まがつく）とか、穢れるといった忌み嫌う。人体で言えば、全体との

調和を欠いた自己成長によって本体を死に追いやる癌細胞のようなものだ。

「生成思想」では、人は、宇宙の一部であり、宇宙創元以来の万有万象と共に同じ時の中に「生まれ成る」神の子孫である。自ら自分の存在意義を定義する必要はなく、人は皆、生まれながらにして歴史的・社会的役割を持って生きているのだから、平等という概念も不必要である。

この原点に立つならば、人類のあらゆる努力は、人と人、人と自然、今と過去、今と未来、人と神、総てが一体となって成長を続ける共生活動へと指向されることになる。個人から国家等のそれぞれのレベルで、対立と分断、略奪と独占、差別と偏見のような社会の一体性に反すること、他者の成長と生成活動を妨げる行為は、本来の共生活動へと正さなくてはならない。公益に資する利他的行為を社会倫理とし、万民の福祉を充実させ、人類と自然が一体的に共生することを目的とする生成思想をもって、万民万象にとつてよりよい世界を構築することが人間の使命であると考えるのである。

このような思想が定着し、社会秩序として慣習化してくれば、自己犠牲は必ず報われる相互扶養の仕組みを誰もが認識できるようになり、自己を超越した社会に対す

る貢献要求は、常識化してくるのである。

二 理性から直霊へ

近代西欧文化において、その正当性を支えるものは「理性」である。教会の権威や王の権利に代わってネイション・ステートが世俗的権威と権力を所有することの正当性なる所以は、ネイション・ステートが人の「理性」による結合体であるからとする。

「理性」についての概念は、今日では多様化しているが、日本文化の視点から「理性」とは何かについてみてみたい。

「すべての人がすべての権利を持っている自然状態では、『万人の万人に対する闘争が生じる』という、トマス・ホッブスに対して、同じく社会契約説を唱えたジョン・ロックは、「われわれ（人間）が同じ性質のものである以上、自分自身のために欲し得る最大の幸せを、何人の手からも奪い取ることは望まない（理性の声）」として、人間は自己の利益を最優先するが、公共心も同時に持ち合わせているとした。ロックによれば「世界を人間に共有のものとして与えたところの神は、同時にそれを生活の最大の利益として便宜に資するように利用すべき

「理性」をも彼らに与えた」としている。

しかし、またロックは市民政府の必然性を、「絶対的自然権を有する」人々が国家として結合し、政府のもとに服する主たる目的は、その所有の維持にある。」とし、「彼と平等の権利を持つものの大部分は均衡と正義を厳密に守る者ではないのだから、自然状態においては権利の享受ははなはだ不確実であり、絶えず他のものの侵略に晒されている。」と説明している。つまり、神から与えられた人間の「理性」とは、合理的効率的に「生存権、自由権、所有権」を保全するための私利的な判断を論理的に推論する能力としている。

同様に、ルソーも社会契約の貸借勘定として「自然状態から社会状態へ移行することで、自然から受けていた多くの利益を失うけれども、その代わり大きな利益（市民的自由と所有権）を受け取る」としている。

個人の権利をより確実に保全するために、集団化し国家を形成するのが近代国民国家の仕組みで、民主主義による法治国家（社会契約）は個人の権利を保全するための私利的手段であると論理的に推論するのが「理性」というわけだ。

ロック的自然状態では、世界には未開の広大な大地が存在し、未だ所有者のいない資源の豊富性ゆえに、

人々は同じものを取り合う必要がない、という条件がそこには成立しているようだ。実際には、神から与えられた自然を人間が所有するなどという考えを持たない健全なる民族の土地を「無主の土地」として強奪占有し、公共財としての自然の恵みや人間の生産物を個人の所有物として略奪したのだが、これらの場合、「理性」は彼らの行為を合法的とする便利な道具にしかならなかった。

また、宗教と近代西欧思想に関しては、今泉先生の皇道文化と西欧文化の比較的視点について、葦津珍彦先生が「今泉定助先生の世界皇化論」（『今泉定助先生研究全集』第一巻・日本大学今泉研究所、昭和四十四年所収）の中で簡明に説明されているので引用する。

「西欧文化のもつとも大きな支柱を成すものは、キリスト教である。キリスト教は、唯一にして万能絶対なる神と、宿罪を固有する人間の対立といふ世界観を前提として形成される。」とし、西欧の道德思想などを一語で概括するのは、はなはだ乱暴なことのように思う人も少なくあるまいが、日本の神道人の立場から見れば、こことわたつた上で「かれらの道德といふのは、神または良心（理性）の至上命令にしたがつて、人間の自然本能的な意欲を抑圧するといふにある」と、キリスト教において

は、「人間が自然本能の欲求のままにする自由」は原罪とし、理性は、神と同様に「人間が自然本能の欲求のままにする自由」を抑制するものとしている。

では、なぜその不道徳な原罪であるはずの「人間の基本的権利」が、近代社会思想において「人類の普遍的価値」としてみなされるに至ったのか。

かかる問いに対して、葦津先生は次のように分析する。

キリスト教では、神と人間とを峻別した立場から出たので「教会」と「国家」とが対立することになって来る。ローマ帝国においては、人間が神に服従せねばならないように、国家は教会に服従せねばならないとの思想が支配した。しかしもともとキリスト教の「天国」と世俗の「地上国家」は、本質的に異なるものなのだ。それはキリスト教の教理そのものが教えているところである。然うだとすれば、地上国家の政治法則は、当然に教会の支配法則と異なるものでなければならないといふので、「政治」と「宗教」の「分化」が現はれて来た。これが西欧の近代文化と称せられるものである。この政治と宗教の文化を中心にして、あらゆる文化の領域において、著しい分化現象が発展し、それが近代科学を生み出し、西欧の物質文明を反映させた。と。

つまり、西欧史に於ける前近代の体制を否定するためには、キリスト教が認める原罪に立ちかえり、これを神から与えられた人間本性の自然権として定義し、旧社会を解体する理論的根拠としたのである。その上で、神によらなくとも、人間は原罪たる欲求を抑制する「理性」を有するとし、神の権威を人間の「理性」に移植することとなる。

そのところを葦津先生は、「近代社会になって来ると、道徳は、自然の本能的欲求をもって「人権」として主張するところの個人対個人の闘争を、合理的能率的に裁き、妥協させるための功利的な技術にすぎないものとなる。功利的な技術には、精神的な権威はない。」と述べて、神に換わって権威を得た人間の「理性」の実態を喝破している。

現在は、国家に依存しなくても自己保全ができる程に富める個人が現れ、その権利をいっそう拡張できる市場というシステムが確立された。彼らにとつて国家と民主主義は、もはや権利を保全するための手段としての有効性は薄れ、むしろ権利の行使を制約阻害するものとなって来た。つまり、国家の制約を受けない自由競争主義による市場原理は、合法的に自然状態に限りなく近い権利

を行使できる正しいシステムとして、世界に新秩序をもたらそうとしている。

既に地球上の未開の地は開拓され尽くし、世界の富が有限であるという現実には遭遇している現代において、「理性」は、万民の幸福のために富を配分することも、平等な福祉を供与することもできていない。むしろ「理性」は、人間の欲望をエンジンとして無制限にマネーの獲得の競争を許容する新自由主義グローバル市場に正当性を与え、富の格差を拡大し、福祉を後退させる原動力となっているのではないか。

このような現状が、「理性」によって正当化されている以上、この問題の「理性」による根本解決は不可能である、といえよう。

今泉先生は、「人類を始め宇宙万有はいずれも天之御中主神の顕はさる、宇宙真理に則り、高皇産霊と張り、神皇産霊と引き、発顕還元一体の所に産霊活動を続けてをる」(『第四編 禊祓について』『今泉定助先生研究全集』第二卷・前出)と述べている。つまり、宇宙の始まりとともに天(天津神、霊、精神)・土(国津神、物質、肉体)・時(柱、修理固成、一体)の産霊活動が発顕し連続と続いているとし、「万有総て天之御中主神の分霊分魂たる神の

子であつて、始めから罪の子と云ふ様なこともあるべからざることである。私共は生まれながらの直霊(なおひ)を現実に発揮せん」ことを天職と位置づけた。

その上で、「神の包容の内なる靈魂として素材をも我々自身の内なる素源霊と成すことによつて、神の恵みに人が参加し、稲は稔り、木は机となるといふように、神と人と一体なる一の「生む」神業が成就するのである。科学とは万有悉くが所を得て「直霊」を発動するように修理固成する努力である。発明発見とは素材の神性を知り、その「直霊」を生む神業である。」と、神と人を結ぶ「直霊」について説いている。

神から生まれた人間は、「直霊」を内在すると言う考えは、人間は神から「理性」を与えられたということと同じ発想である。しかし、「理性」の認識は、スコラ学の影響により理論的技法によつて発展した結果、人間の論理的推論力で証明しうる範疇のものへと狭隘化したように思われる。さらに、近代西欧思想では、「理性」の神性探求から離れ、自己保全の論理と関連付けたところから、神性発顕(理想的な行為をする自己)と私利的欲求(欲求に基づく行為をする自己)との区別が曖昧化した。その結果、現代では、人間に内在する「理性」探求のための十分なる内省もせず、私利的欲求を「理性」として正当

化する傾向が極端に強まっている。

このような状態を、今泉先生は神道的視点から、「直霊」の統一を欠き分裂した「禍津日（まがつひ）」の状態であり、人間がその天職を忘れた状態であると主張する。つまり、かかる状態は、飽くことを知らぬ人間の欲求が本来の自性発揮に不要なものまで受け入れた結果穢れに負けて「禍津日」に化すと考えられたのである。

このような状態に陥らないように「禊祓」をして穢れを祓い清浄を保ち、内在する「直霊」を今現在に顕わす自発的努力が必要となる。従って、「禊祓」の行は、今日の社会においては極めて重要な意味を持つことになったのである。

今泉先生は、「禊祓」について、「内部に於ける靈魂の活動が、疲弊困憊したから、外部から大自然の靈気を振り注ぐこと、即ち「靈注ぎ」（みそぎ）である。かくして、腐敗混乱したる部分を摘出し、淘汰すること、即ち「身削ぎ」である。これによって、弛緩せる靈魂を緊張せしむる「張る靈」（はらひ）となり、一切の汚穢を「掃ひ」清めることができる」と規定し、相対分裂性の禍津日を絶対統一性の直霊に転回還元することが、禊祓の全意義だと主張した。

つまり、人間が「直霊」を内在しているという普遍的

状態だけでは、神の子としての自性発揮には至らず、ともすれば自らの欲求に負けて禍津日に化し、あるいは氣力が枯れて「穢れ」ることになる。そうならないように「禊祓」の行事をして、神と一体と成るよう努めることが重要なのである。

先生は、「直霊」をめぐって「宇宙は渾然たる一体をなし、太陽系は一つの統一体系を造り、地球は一つの統一形態をなし、地球上の万有万象も亦常に統一体として生成し、発展するのである。此の靈魂の絶対統一性が、即ち直霊と名づけられるものである。」と主張している。この点は、今泉先生の神道観を理解する上で極めて重要なところであろう。自然即ち地球上の万有万象と一体となり、宇宙・時・神と一体となることで「直霊」が働くというのだから、人間は、社会そして大自然の一員として生まれ成り、全体とともに成長していくという発想こそが、万民の幸福と世界の平和を構築する根本原理となる、という信仰論理なのである。

三 時と中今

今泉先生は、存在思想と生成思想の比較のなかで、觀念について次のように説いている。

（存在思想においては）学問に於ても研究するものと

研究されるものと対立するに到つてゐる。客観に「在る」物なり現象なりの総てを、それらから離れた一の「在る」主観的立場から観察するのである。

研究される所のは総て客観化されて対象となり、研究する人間は「我あり」と言ふ対象の外に立つわけである。(中略) 我自身の研究も亦、我自身を客観に在るものとして対象化し、別の我たる主観的「在る」の立場から眺めて我を知つたことにするものが存在思想から発展した従来の科学といふものである。

他方「生成思想においては」「成る」立場に入つて始めて体得しうる境地を言ひ、「成る」によつてのみ眞の我が在り、我を知ることもあるのである。」と述べて、宇宙万有と同根一体の生命を呼吸し、それを体験し、それを体得し、体顕することで真理に至ると、主張する。

同じ思想を、「時」に関する次の言説にも確認できる。「過去のもの」と現在のものとは別に二つあるのではなく同じもの内から成る発展である。(存在思想の立場から外から見ると二つであるが、内から見ると一つである。)と述べ、「内から「成る」の一体的立場に立つて「異る」の眞義に徹し、過去がそのまゝ、現在となり未来となることを知り、子供がそのまゝ、大人となることを知り、進ん

で万有の対立を去つて之と一体になり万有を眞に知るの学問が開かれるのは「成る」の立場からである」と主張する。

今泉先生のかかる思想は、『古事記』冒頭記事の「天地初発之時」に基づくものであらう。即ち、「時は高天原と共に成り、天之御中主神と共に成つたのであり、始めも無く終りも無い。神と時と宇宙とは一緒である。」とし、「神、宇宙、時を離れた(別々の)ものと見て、例へば神や宇宙を時の支配の下に置き、神はいつからあるかとか、宇宙はいつ出来たかと云ふ様に考へては解らなくなり、又宇宙万有を本地にして考へると無神論、唯物論に墮することになり、更に神が宇宙も時も造つたものとする」と神を超越させて後に説くやうな存在思想に陥る。」(第二編 古典の精神)『今泉定助先生研究全集』第二巻・前出)と説くのである。

即ち、自らが、宇宙の当事者であり、時の当事者であり、神の当事者として、宇宙の中に生まれ、宇宙の中に行い、宇宙の中に死ぬ。かように、宇宙の中で生きて、行い、成し遂げる自己を体現する思想を提言しているのだから。

時は、過去と今と未来を一体となす。今の空間的つながりを時系列として一体化する。つまり、宇宙創元以来

の物質的・靈的活動の総てが時として一体化し、渾然たる統一体としての宇宙をなしていると理解される。そのように考えるならば、人間一人一人が生まれ成り、生命を授かった心身の働きは、宇宙創元以来続く全体の生成活動の一翼を担う大いなる意義を有するということになる。

神道には、連綿と続く「時」の考えがあつて、それを「中今（なかいま）」とよぶ。宇宙の創元から未来へと無窮に続く時は常に「今」に集約顕現されるといふ考え方だ。天の下（宇宙）をひとつの家と為さんとする「八紘為宇」の意思と行動は、宇宙創元以来、そして神武建国以来、時と共に休むことなく連綿と「今」に顕現されるからこそ、天壤無窮に栄えるといえるのであらう。

自らが、時の内に主体となつて行動し成長発展するという積極的生き方である。「今」を大事にするという考えは、過去の出来事に意義を持たせ、将来の基盤となる「今」に精一杯の努力を惜しまないということだろう。反対に、「今」を無駄にするということとは、個人のみならず人類のそして地球の歴史の営みと努力を無駄にし、子々孫々の未来を破壊することにつながる。その「今」に人間一人ひとりが「世のため人のため」と力を尽くすことが、宇宙に生まれてきた重要な意義ではなからうか。

物質としての肉体の共有は適わないが、精神・心・靈の共有は可能であり、人類と自然の成長発展に貢献した人の精神は同じ時に生きる人々のみならず、時を違えて生きる人々の心までをも感化し、共鳴させ一体化させるのである。そうすれば、一人では到底できるはずもない大事業が、空間的広がりだけではなく時間的継承によつて達成しうるのである。

私たちが、「伝統精神の継承」と呼ぶところのものは、一個人では達成できない大きな目標を、世代を超えた意志の継承という長期的な努力の積み重ねにより成し遂げようとするものである。それは、宇宙創元の理を悟り、先達の思い描いた理想や理念に賛同し、時代を越えてその遺志を引き継いでいくことで、時を貫く意志の柱を打ち立てることになる。それによつて、一代では不可能な理想社会の実現を歴史的集団の事業として維持・発展させることを、日本人は価値あるものと見なしてきた。

この視点からは、個々の人間がその一生涯に自分のためにどれだけのことを成し遂げたのか、という利己的成果に惑わされることなく、また社会に生きる人間として、同じ時代に生きる人々との絆や融和だけではなく、過去や将来、即ち祖先や子孫との心と意志のつながりをも大事にし、時と空間をまたぐ無窮の大事業にどのように貢

献したかという歴史的役割こそ価値があるものとみなすことになる。従って、歴史的役割とは、一人の行為が歴史を通じ多くの人々に貢献するという不朽の利他的使命を為しえたともいえる。

このような、積極的生き方の理想が「中今」であり、それを促す思想を「八紘為宇」と呼んでいる。「八紘を掩おほひて宇と為せむ」という『日本書紀』に示された神武建国の詔勅にある日本建国の思想である。国が、そして世界が、大自然が苦しみも楽しみも分かち合い、共に助けあい、共に成長をねがう家族のように暮らす世を造り為さんとする、主体的かつ継続的、生成活動を目的とする人類普遍の思想であろう。

四 八紘為宇の実践

西欧思想が世界を覆うようになった近代以降、我々人類は、人間の「存在」と「理性」を過信し、多くの過ちを犯してきたように思われる。

その要因は、神・時・自然と一体の人間の自性（直霊）を、自我意識の狭隘なる空間に閉じ込め、人間を孤立した物質的「存在」として蔑んできたことであろうし、あるいは神・時・自然から生成した公共の恵みを人間個人が所有できると過信し、他者と社会と自然の本来あるべ

き成長発展を妨げてきたのではないか。

このような教訓を導くならば、我々は、禍津日を禊祓い、本来の宇宙の一員として正しく生きるための社会を再構築しなくてはならない、といえよう。今泉先生が「人間はその団体生活を離れて、個人主義に走り、自由主義に赴くことが、邪悪の出発点である。団体生活の分裂解体が人生悪、社会悪の根源である」（第四編 禊祓について）『今泉定助先生研究全集』第二巻・前出）と指摘しているように、氏神様を中心とした伝統的村落や家族的に結ばれた共同体としての「家」を解体したことに、現在の孤独老人、年金・介護問題、就職難問題、いじめ、格差など現代的な社会問題の根本原因を求められよう。その前提に立つならば、我々は、あらためて共同体としての「家」を再構築することから始めなくてはならないのである。人間は、社会の中で教え育まれ、体験し体得し体顕することで「直霊」の自性を自覚し発顕できるようにする事が肝要であろう。

「成る」の体験、「知る」の体得、「行う」の体現の三位一体の境地の発顕のみが学問的眞実を語り得るものに外ならない」（第二編 皇道と哲学）『今泉定助先生研究全集』第二巻・前出）と今泉先生が説明しているように、理

論・推論への過信を疑い、共助社会の中で「体験、体得、体顕」するところの学問を重視するべきであろう。

「我々は宇宙の中に生きておるし、我々もまた宇宙を構成する分子に外ならない。従って我々は宇宙と一体に「成る」ことができなければ宇宙を「知る」ことはできない」のであるし、また「(宇宙の)外から抽象して得た概念はいかに理論的に整備されたとしても、生きた宇宙はそこから出てこないのである」と今泉先生が指摘しているように、例えば、日本の武人に成って武道の稽古を体験すれば、次には日本の武を体得して「知る」こととなろう。体得して知ったことは、実際に「行う」ことで体現できることになろう。これこそが真の学びと成長であるか、理論的に推論してみたところで日本の武の何たるかは「行う」ことはおろか「知る」ことすらもできないはずがなからう。

今こそ、グローバル化によって解体された伝統的「家」を、新たな共助体の「家」として再構築するべきではないか。

そこでは、共助の精神である「世のため人のため力を尽くす」こと、「人様に迷惑をかけてはいけない」ことを基本的価値慣習とするべきであろう。共助体の一員としての自覚が芽生えれば、自発的に社会の一員と「成つ

て」共助体の仕事に加わる。共助体の一員として一所懸命働けば、仕事を「知り」、所を得ることになる。共助体の中で己の所を得たなら、社会のために為すべき仕事を一生懸命全うする。それが、人々の役に立ち幸福と成長に貢献すれば、おのずと他の人々から感謝され、生涯を全うした後もその生き方は崇敬の念を持って語り継がれ引き継がれ、共助体の守り神となって永遠に祭られる。その人の精神は歴史伝統として、不朽の時と共に生き、何時の時代でも「今」その時々の人々と共に生きつづける。このような共助体の形成を身近な町内会や自治会あるいはNPO等をはじめ、夫々の共助体の特性を相互に尊重しつつネットワークを構成し、それが地方行政や国政に広がり、更には世界に広げる。人々が心を一つにして「八紘為宇」を実践する共助体が新たな「家」となりうる。

そのような実態の中にこそ、真の平和があり、ここに真の幸福があるのではないか。人間が神と、時と、自然と一体と成って宇宙創元の活動に参画し、皆が天上無窮の成長発展のなかに生きる世界が実現される、と思われる。

今泉先生が祈願したものの、それは、神勅をいただいた

天皇と民が為すべき使命を自覚し、体験・体得・体顕し、それを世界に示すこと。この世が高天原に成るようになし続けること。そのために、「宇宙の中に生まれ、宇宙の中に行い、宇宙の中に死ぬ」という気概をもち、全世界において、天、国、家、人が一体となって八紘為宇の受持の神となつて、万有をして眞実ならしめる「行う」自己を今此処に体現することが望まれる。無窮の中今に、自分が天之御中主神に帰一して「マキリカヘルノミタマ」の覚悟を持たなくてはならないであろう。

(明治神宮武道場至誠館館長)